

県立神戸高等商業学校と一谷藤一郎

—随筆「ハイエク教授の素描」「ゴットフリード・ハーバラー」の復刻¹—

松山直樹²

Abstract

Toh-ichiro Ichitani (1900-1979), an economist of financial theory, was a founding member of Kobe Higher Commercial School, established by Hyogo Prefecture in 1929, which is a predecessor of the School of Economics and Management at University of Hyogo. Prof. Ichitani played an essential role in making this school a prestigious academic institution in Japan before the World War II. In 1933-35, he studied in Vienna and London with Ludwig von Mises, F.A. Hayek, Gottfried von Haberler, Fritz Machlup, and other Austrian economists. After returning to Japan, he introduced the Austrian School of Economics into Japanese academic community through several publications including his translation books of Hayek's works, *The Pure Theory of Capital* (1941) and *The Road to Serfdom* (1944). As Prof. Ichitani recalled later, the overseas research in the 1930s had the most decisive influence on his economics ideas. This paper, therefore, reproduces Prof. Ichitani's two essays on Hayek and Haberler respectively.

Keywords: オーストリア学派経済学、通貨主義、銀行主義、中立貨幣、伊藤眞雄

JEL Classification Codes: B13, B31, I20

¹ 本研究は、資料調査の段階から大変多くの方々にご協力を賜りました。本稿を作成するにあたり、一谷藤一郎教授の長女恭子様は、筆者の突然の連絡にも関わらず、一谷教授の論文の復刻を快く許可して下さいました。改めて心より御礼を申し上げます。恭子様もかつてパリ大学に留学されている際に、ウィーンにてハイエク教授夫妻とお会いになられたこともあるそうで、当時の思い出についてもお聞かせくださいました。一次資料の調査に関しては、神戸大学大学文書史料室、淡水会（県立神戸高等商業学校、県立神戸経済専門学校、神戸商科大学、兵庫県立大学の同窓会）、兵庫県立大学神戸商科学術情報館のスタッフの方々にご協力を賜りました。一谷藤一郎教授の経歴に関する調査に関して、大阪大学附属図書館のスタッフの方々にご協力を賜りました。一谷教授の著作物の権利関係を確認するにあたって、大阪大学経済学会の池之内恵梨子様ならびに株式会社東京創元社の竹内牧子様に全面的にサポートをしていただきました。この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。本研究は JSPS 科研費 20K02957 の助成を受けたものである。

² 兵庫県立大学経済学部・国際商経学部 准教授 email : naoki.ma@econ.u-hyogo.ac.jp

はじめに

本稿は、兵庫県立神戸高等商業学校（以下、県立神戸高商と略記）において、金融論や財政学を担当した一谷藤一郎（Toh-ichiro Ichitani, 1900-1979）による随筆——「ハイエク教授の素描」と「ゴットフリード・ハーバラー」——を復刻する。1929年（昭和4年）、一谷は兵庫県立大学³国際商経学部の起源である県立神戸高商に赴任した。彼の経済学研究は、オーストリア学派経済学研究に基づくものであり、県立神戸高商時代の在外研究を経て本格的に展開された。

一谷は、県立神戸高商における在外研究制度の第一期派遣者として欧米を訪問した。彼はベルリン大学附属語学学校に滞在中に、F.A.ハイエク（Friedrich August von Hayek, 1899-1992）⁴やゴットフリード・ハーバラー（Gottfried von Haberler, 1900-1995）⁵に手紙を書き送り⁶、彼らとの交流を求めてウィーンへ向かった⁷。ウィーンでは、フォン・ミーゼス、ハーバラー、マッハルプ、モルゲンシュテルンといった経済学者たちと交流し、ハイエクとはロンドンで議論を交わした。このときの彼らとの交流が、その後の一谷の経済学研究に根深い影響を与えた。特に一谷はハイエクの経済学研究に強い関心を持っており、帰国後には彼の代表的著作である『資本の純粹理論』（1941年）や『隷従への道』（1944年）をいち早く翻訳した⁸。一谷によるハイエクの邦訳書やオーストリア学派経済学に関する複数の論稿は、戦後日本でのオーストリア学派経済学の普及において一翼を担ったと考えられる（一谷 1956, 1958a, 1958b, 1958c）。

³ 兵庫県立大学は、2004年に神戸商科大学、姫路工業大学、県立看護大学を統合して設立された。県立神戸高商は、1944年に県立神戸経済専門学校に校名を変更しており、1948年に神戸商科大学に昇格した。

⁴ ハイエクの自由主義経済思想は日本においても広く知られてきた。彼は1974年に国立スウェーデン銀行アルフレッド・ノーベル記念経済科学賞（通称・ノーベル経済学賞）をグンナー・ミュルダールと共同受賞した。その際、一谷はハイエクの功績を「貨幣と経済変動についての理論面での卓越した業績と、経済的・社会的・制度的現象の相互関係に対する透徹した分析である」（一谷 1977, 24）と解説した。

⁵ ハーバラーは、古典派経済学者デヴィッド・リカードの比較生産費説を一般均衡分析に再構成する試みや、景気循環論の視点からケインズ経済学を批判する方法論の展開などによって世界的に知られており、第二次世界大戦後のハーバード大学を代表する経済学者であった。

⁶ これらの手紙の所在や内容等については明らかでない。継続的な資料調査が必要である。

⁷ 一谷がハイエクやハーバラーといかにして知己を得たのかは定かでない。一谷自身が研究活動を通じて、すでに彼らと手紙のやり取りをしていた可能性もあるだろうし、かつてエドウィン・キャナンのもとで研究していた県立神戸高商の伊藤眞雄校長から紹介を得たのかもしれない。あるいは、1923年から1926年にかけてイギリスやドイツに留学した荒木光太郎（1894-1951）の影響があるのかもしれない。荒木は、一谷が交流した人物たちと交流しており、戦前日本においてオーストリア学派経済学の意義を紹介した第一人者である（牧野 2018）。この点は追加的な資料調査や研究が必要である。

⁸ 現在、二著それぞれに関して新訳が発表されている。前者は、『ハイエク全集』（第二期、第8巻・第9巻、春秋社、2011年・2012年）所収の江頭進訳『資本の純粹理論[I]』・『資本の純粹理論[II]』がある。後者は、一谷藤一郎・一谷映理子による改訳『隷従への道：全体主義と自由』（東京創元社、1992年）、『ハイエク全集』（第一期、別巻、春秋社、1992年）所収の西山千明訳『隷属への道』、そして村井章子訳『隷従への道』（日経BPクラシックス、2016年）がある。

一谷はハイエクに関していくつかの論稿を著した。その最初のハイエク論は、在外研究から帰国した翌年に県立神戸高商の『學友會誌』（第10号、1935年）に寄せた随筆であろう⁹。その随筆には1930年代前半のLSEにおけるハイエク像が描かれている。さらに、その随筆の追記には、「私はさきに神戸商大新聞部¹⁰の依頼に応じ、今秋発行せられるべき同紙記念号『六甲台』に『ハーバラー Gottfried Haberler』と題する一文を寄せた。本稿に興味をもたれる読者は同紙を併読することによって、単に本稿に於いて、ところどころ比較対照せられたに過ぎないハイエクとハーバラーの性格の相違を、更に明確に理解せられるであろう」という指摘がある。すなわち、彼は同年にウィーンで交流を深めたハーバラーに関する随筆¹¹も発表していたのである。

かくして本稿では、一谷による最初のハイエク論である「ハイエク教授の素描」（『學友會誌』（県立神戸高商）所収）と、その姉妹編である「ゴットフリード・ハーバラー」（『神戸商大新聞』（神戸商業大学）所収）の二つの随筆を復刻する。これらの内容は、日本の経済学者によるオーストリア学派経済学研究の端緒を示すものであると共に、県立神戸高商における研究教育制度を探究するうえでも重要な一次資料である。二編の随筆を復刻することに先立ち、一谷の経歴を振り返り、県立神戸高商における彼の活躍を概観する。

解説：一谷藤一郎と県立神戸高等商業学校

1. 略歴

一谷藤一郎は、県立神戸高商の創立時から15年間にわたって教授職を務めた。同校では、伊藤眞雄初代校長らと共に県立神戸高商における研究教育の基礎を構築した。

一谷は明治33年（1900年）に京都市に誕生した。大正8年（1919年）に京都市立第一商業学校（現、京都市立西京高等学校）を卒業後、民間企業で一年ほど働いてい

⁹ 今回の資料調査によって『學友會誌』の当該の号を入手することができた。同誌のバックナンバーは、本学の神戸商科学術情報館や政策科学研究所だけでなく、他の大学図書館等にもほとんど所蔵されていない。CiNii Books (<https://ci.nii.ac.jp/books/>) の検索結果によれば、県立神戸高商の発行した『學友會誌』を所蔵しているのは、全国の図書館で神戸市立中央図書館のみであった（最終アクセス：2020年12月25日）。ところが、同館に所蔵されている『學友會誌』は第11号と第12号であり、一谷のハイエク論を掲載した第10号は国内のいずれの図書館にも所蔵されていない状態にあった。

¹⁰ ここで指摘される「神戸商大新聞部」とは、神戸商業大学の新聞部である。兵庫県立大学の前身校である神戸商科大学の新聞部ではない。神戸商業大学は、官立神戸高等商業学校が大学に昇格した際に設立された旧制の官立大学である。後に同大学は、戦時期の神戸経済大学を経て、1949年に新制の国立大学として神戸大学となった。

¹¹ 当該の随筆は、『神戸商大新聞』第65号（1935年10月25日発行）の付録『六甲台』（神戸商大新校舎竣工記念特輯号）に所収されている。『神戸商大新聞』のバックナンバーは神戸大学大学文書資料室に所蔵されている。

た後、大正 10 年（1921 年）に官立神戸高等商業学校（現、神戸大学）に入学した。大正 14 年（1925 年）3 月に同校を卒業後、京都帝国大学（現、京都大学）に進学した。日本経済が不況に直面するなかで、彼は経済原論と哲学に特別な関心を持って勉強したという（一谷 1961, 391 頁）。この時期の京都帝国大学では、経済原論の講義は田島錦治と河上肇が担当し¹²、哲学の領域では、西田幾太郎や田辺元といった京都学派の中心人物たちが活躍していた。昭和 3 年（1928 年）3 月に京都帝国大学を卒業した後、一谷は同大学の助手に採用された。こうして、京都帝国大学の経済学部で一年ほど務めた後、一谷は県立神戸高商の教授として採用されることになり、昭和 4 年（1929 年）11 月に同校に赴任した。

一谷は、県立神戸高商の研究教育において中心的な役割を担っており、昭和 8 年（1933 年）には在外研究の機会を得た。欧米の諸大学において、一谷はフォン・ミーゼス、ハイエク、ハーバラー、マツハルプ、シュンペーター、ナイトといった、20 世紀を代表する経済学者たちと交流したが、後述するように、その経験が彼の経済学研究に決定的な影響を与えたことを後に回想している。一谷は LSE での研究活動を終えた後、ハイエクの手による紹介状を携えて渡米し、ハーヴァード大学でシュンペーターに面会し、シカゴ大学ではフランク・ナイトと交流した。その後、スタンフォード大学を訪問して帰国の途についた。アメリカでの研究活動は半年足らずであったが、その研究成果は、昭和 13 年（1938 年）に貿易研究室の研究報告（第一冊）として発表された『米国金融統制の基本問題』に結実した。昭和 16 年（1941 年）には、主著『金融統制の理論』（有斐閣）を発表した。

終戦前後の数年間、一谷は大阪商科大学（現、大阪市立大学）で教鞭を執っており、さらに昭和 23 年（1948 年）から昭和 39 年（1964 年）にかけては、大阪大学の教授職にあった。一谷は、理論経済学者として活躍しただけでなく、ハイエクの『資本の純粹理論』や『隷従への道』の翻訳や、オーストリア学派経済学に関する論稿等を多数執筆しており、県立神戸高商時代の研究活動を基礎にしながら、日本におけるオーストリア学派経済学研究の代表的人物となった¹³。彼はまた実務面においても貢献して

¹² 田島と河上は経済原論を隔年で担当した。田島は京都帝国大学法科大学の最初の経済学教授として活躍し、京都帝国大学経済学部の初代経済学部長や立命館大学学長も務めた（京都帝国大学 1934；小島 1934）。河上は『貧乏物語』によって世間に広く知られた経済学者である。彼は、1920 年代後半に唯物史観の研究に没頭し、研究上の関心を近代経済学からマルクス経済学へ転換した（上谷 2021）。

¹³ 一谷は、『経済学小辞典』（大阪市立大学経済研究所編、1951 年）、『世界名著大事典』（平凡社、1960 年）、『世界大百科事典』（平凡社、1981 年）等において、オーストリア学派経済学に関連する項目を担当した。それだけでなく、一谷は 1958 年には『経済セミナー』（3 月号、4 月号、5 月号）にオーストリア学派経済学を紹介する記事を連載した。そのなかで、一谷はオーストリア学派経済学について次のように説明した。「現在オーストリア学派が一般的に限界効用学派の

おり、大阪大学では学部長や大学評議員等を歴任し、金融学会や日本経済政策学会等の理事も務めた。一谷は大阪大学の退職後も複数の大学で教鞭を取り続け、昭和54年(1979年)に京都にて逝去した。

一谷の研究者としての人生は、京都帝国大学時代に直面した金融恐慌への学問的関心をきっかけにして開始され¹⁴、県立神戸高商時代の在外研究等を通じてオーストリア学派経済学の最先端の経済理論に触れることで開花した。第二次世界大戦から高度経済長を間近で観察しながらも、一谷は古典派経済学の研究、オーストリア学派経済学の研究、金融論・貨幣論の研究、翻訳書の出版など、広い射程で研究を展開した。

2. 県立神戸高商について¹⁵

一谷の着任時期が県立神戸高商の創設年であったことから示唆されるように、彼の経済学者としての活躍は、揺籃期の県立神戸高商と軌を一にするものである。

県立神戸高商は、大正12年(1923年)に帝国議会で官立神戸高商の大学昇格が決定した後、世界最大の貿易港であった神戸港を抱える兵庫県下には、同校の役割を担うべき高等教育機関が必要であるとの考えから、市民による設立運動などを通じて、昭和4年(1929年)に設立された。

県立神戸高商の初代校長は、伊藤眞雄(Masao Ito, 1878-1937)であった。伊藤は、県立神戸高商の校長職に就く以前、市立大阪高商(現、大阪市立大学)で経済原論等を担当し、都市計画に関する理論・政策研究を展開した。実務面では、校長事務取扱等を歴任すると共に、関一と協働して同校の大阪商科大学への昇格を実現させた。

県立神戸高商の研究教育制度は、伊藤校長の運営方針に基づくものであった。その

主流と見なされているのは一体いかなる理由によるのであろうか。…メンガーは論理的にきわめて鋭く、…数学的表現形式を用いなかったために、一般に理解せられ易いという特徴をもっていたばかりではなく、当時のドイツ経済学会で支配的勢力のあったシュモラー(G. Schmoller)の主宰する歴史学派に敢然と対抗して、方法論をめぐって華々しい論戦を交え、すでに国内的には確固たる地位を築き上げていたが、さらにボエーム・バヴェルク(E.v. Böhen-Bawerk 1851-1914)とヴィーザー(E.v. Wieser 1851-1926)のような優れた後継者ないし協力者が、メンガーの理論の一層の展開とその普及に努めたために、諸外国におけるオーストリア学派の名声が著しく高まるに至ったことによるものと思われる。したがって基本的な着想はすべてメンガーに帰し得るとしても、オーストリア学派の形成に関する限り、ボエーム・バヴェルクとウォーザーの不撓の努力を忘れてはならないのであって、時とするメンガー、ボエーム・バヴェルク、ヴィーザーの三人をこの学派の創始者と呼ぶこともあるほどである」(一谷 1958, 9)と指摘し、オーストリア学派を構成するメンバーを初期と後期に区分した。すなわち、初期オーストリア学派は、メンガー、ボエーム・バヴェルク、ヴィーザー、ザックス、コモルチンスキー、マイヤー、ツッカーカンドル、グロス、シュレルン・シュラッテンホーフエン、ライシュ、シュラーらによって構成されるという。後期オーストリア学派は、マイヤー、ミーゼス、ハイエク、ハーバラー、ストリグル、モルゲンシュテルン、マッハルプ、マール、ローゼンシュタイン・ローダンらによって構成されると共に、彼らは「ウィーン学派」ないし「新ヴィクセル学派」として指摘されることもあるという(一谷 1958a, 9)。

¹⁴ 一谷は、1928年5月から1929年5月まで京都帝国大学で助手として経済学部勤務しており、「私のいわゆる研究履歴は、まさにこの年[1928年(昭和3年)]から始まる」(一谷 1963, 46)と回想している。

¹⁵ 県立神戸高商の創立と伊藤校長による大学運営等に関しては、松山(2021)を参照されたい。

特徴は、以下の三点に集約される。第一に、県立神戸高商は、当時の社会思潮に同調することなく、「自由にして清新、然も实际的で且つ堅実なる学風」の実現を目指した。第二に、同校では、「一、貿易・経済学に重点をおくこと、二、社会の実需に即応できる学力と技能を養成すること、三、自律的精神を養うこと」が、研究教育上の指針として定められた。そして第三に、同校の学生に対しては、「諸子、宜しくスマートたるべし」という教育理念が掲げられた。伊藤校長は、各種の式典において「スマートなチェントルマンライクな人間を養成するのが私の念願である」と宣言することが常であったという（『故伊藤校長追悼號』、高木 1977; 1978、小松 1979 等）。

さらに、伊藤校長による運営の下、県立神戸高商は 1930 年代に高等教育機関としての研究教育環境を整えた。例えば、紀要『研究と資料』（1931 年に創刊）¹⁶、在外研究制度（1932 年に設置）、そして貿易研究室（1935 年に設置）¹⁷は、現在に至るまで発展的に継承されている。地方で、教育制度に関して、伊藤校長は県立神戸高商の地理的要因を考慮して、貿易や経済学を中核とするカリキュラムを構成した。特に、研究科目（ゼミナール）は、貿易、経済学、および商学の主要科目について開講した。こうした県立神戸高商の研究教育制度は、後発的教育機関として、近隣の神戸商業大学（旧官立神戸高商）との差別化を意識して整備されたものと考えられる。

3. 県立神戸高商における一谷教授

県立神戸高商の貿易研究室は、国際的な経済問題について理論と実証の双方から学術的研究を展開することを目的にして、昭和 9 年（1934 年）に設立された。一谷は二年間の在外研究を終えて帰国した後、貿易研究室の初代室長に就任し、その運営に尽力した。さらに紀要『研究と資料』の編集作業や研究叢書の創刊を実現する等、一谷は県立神戸高商の中核的人物として、とりわけ同校の研究制度の発展に貢献した。

本稿が復刻の対象とする一谷の随筆は、彼の在外研究が舞台である。後年、一谷は県立神戸高商時代の在外研究について次のように回想した。

¹⁶ 伊藤校長は『研究と資料』創刊号に「發刊の辭」を寄せ、同誌が「各自の担任学科に関し学術上の研究または調査をなしたるもの、及びその研究や調査の上に必要または有益なる資料を認めたるものを集めんとするのであって、それぞれ担任学科の教室における講義の延長もしくはその補充として利用さるべきものである」（伊藤 1931, 1）と宣言した。

¹⁷ 貿易研究室の初代室長は一谷であった。一谷室長による運営下で、研究叢書や研究報告などの学術媒体が発行され、1936 年に谷口重吉教授の『オーリンの貿易理論』が研究叢書の第一巻として出版され、翌年には一谷自身が研究報告の第一冊として『米国金融統制の基本問題』を発表した。特に、伊藤校長は、一谷の『米国金融統制の基本問題』に「發刊の辭」を寄せており、貿易研究室の目的を明示した。すなわち、「本校に於ける所謂はゆる貿易研究室なるものは、本校の環境より観たる特殊の地位に鑑みて設けたるものであって、貿易及びその他の国際的経済問題に関し理論上または実際上の学術的調査研究を行い、而してその結果を本校の教授上に利用すると共にこれを外部に発表するを以て目的とするものである」（伊藤 1937, 1）。

私の研究の上に最も決定的な影響を与えたのは、一九三三年から三五年に至る二年間の在外研究、ことに一年二ヵ月にわたるウィーンでの研究生活である。私は出発前からハイエク、ハーバラーの指導を直接に仰ぐためにできるだけウィーンに長く止まることを計画していた。(一谷 1963, 46)

このように、在外研究で訪れたウィーンでの経験は、その後の一谷の経済学研究に重大な影響を及ぼしたのである。尚、上記の引用文において、一谷は「指導を直接仰ぐ」と謙っているが、実はハイエクが1899年生まれ、ハーバラーは一谷と同じく1900年の生まれである¹⁸。

さて、ウィーンに到着した一谷は、ハーバラーの歓待を受けた。緻密な分析と誠実な研究姿勢、そして穏やかな人柄の持ち主のハーバラーとは、親しい友人として付き合い合っていくことになった。ウィーンの学者たちと多くの時間を過ごした後、一谷はハイエクを訪ねてイギリスへ渡り、LSEを研究活動の拠点にした¹⁹。一谷はハイエクの講義やゼミナールに参加することを通じて、彼の資本理論や貨幣理論を直に学んだ²⁰。一谷は、在外研究におけるオーストリア学派経済学者たちとの交流を通じて、貨幣の中立性に対する問題関心を深めており、帰国後に「中立貨幣の理論」(『経済論叢』京都大学、1935年)を発表した²¹。

前述のように、一谷は京都帝国大学で助手を務めていたときに金融恐慌を経験し、金融論の研究を開始した。興味深いことに、一谷は経済学の古典的著作を分析することから経済学研究を開始した。当時においても、多くの経済学者たちは、最新の研究

¹⁸ 1930年代、若きハイエクはLSEのトゥック記念講座経済学教授として、資本理論、貨幣理論、景気循環論といった研究領域において活躍しており、1927年にオーストリア景気循環研究所所長時代に発表した『貨幣理論と景気循環』によってすでに世界的に知られる経済学者でもあった。同様に、同年代におけるハーバラーは、ウィーン大学の経済学および統計学教授として、貨幣理論、景気循環論、国際貿易論といった研究分野で活躍していた。彼らは共にウィーン大学における経済学教育の中核にいたフリードリッヒ・ヴィーザーの指導を受けており、後にルードヴィッヒ・フォン・ミーゼスからも研究指導を受けている。

¹⁹ 一谷はイギリス滞在時に、A.C.ピグー(ケンブリッジ大学経済学教授)の特別講義にも数回出席している(一谷 1961, 392)。しかし、それを裏付けるような一谷の論文やメモ等が見つかっていないため、詳細は不明である。

²⁰ 一谷は、ハイエクが『資本の純粹理論』を出版するのに先立って、彼から直接的に資本に関する研究内容を聞く機会に恵まれた。一谷による『資本の純粹理論』および『隷従への道』を中心とするハイエク経済学の解説は、『経済学説全集』(第10巻)所収の「第四章 オーストリア学は経済学の新展開」における「第二節 フリードリッヒ・フォン・ハイエク」に見出すことができる。そのなかで、一谷はハイエク経済学には、景気循環論、資本の純粹理論、自由主義経済の三つの主要な論点があると解釈して、詳細に議論を展開している。

²¹ 一谷は、「その後、ケインズが『一般理論』において、この問題を再提起したのを契機として、戦後、ハンセン、ヒックス、カルドアなどがケインズに同調して安定貨幣を支持しているに反し、マッハルプが中立貨幣の立場を固守していることは、私にとってははなはだ興味深いのである」(一谷 1963, 46)と回想しており、貨幣論研究が留学時代における研究上の大きな関心であったことを述べた。

成果——J.M. ケインズの『貨幣改革論』（1923年）や D.H. ロバートソンの『銀行政策と価格水準』（1926年）等——を参考にしながら経済問題の解明を試みていたが、一谷によれば、「一見迂遠な道であろうとも、まず古典派に立ち返ることを何よりも必要と考え、リカードオ理論の研究に着手した」（一谷 1963, 46）という。一谷は現代的な金融理論の基礎的な議論を再検討するべく、デヴィッド・リカードウやヘンリー・ソントン等の原書を綿密に分析した（一谷 1931; 1932a; 1932b; 1936a; 1936b 等）。このような古典的著作に対する地道な分析が、一谷の経済学研究の基調をなしていた。

県立神戸高商時代を通じて、一谷は、古典派経済学とオーストリア学派経済学の研究を基礎にして、（1）通貨主義と銀行主義²²、（2）中立貨幣と安定貨幣、（3）貯蓄・投資の均等化という三つの研究を展開し、それらは主著『金融統制の理論』（初版 1941年、増訂版 1943年）に結実した（一谷 1963）。これらの業績によって、一谷は経済学者としての地位を確立したが、前述のように、彼の経済学研究において最も大きな影響を及ぼしたのが、県立神戸高商時代の在外研究であった。本稿で復刻される二つ随筆は、在外研究における思い出を振り返ったものであるが、1930年代における国際的な経済学研究の諸潮流を概観することを可能にする資料でもある。一谷による二編の随筆を通じて、ハイエクやハーバラーの人柄や研究に取り組む姿勢、そして異なる文化圏で研究活動を行うことの魅力や当時の汲汲としない学術的雰囲気も感じ取ることができよう。

²² 研究を進めていくなかで、一谷は「通貨主義学派」（代表者：オーヴァーストーン卿、トレンズ：貿易によって金銀や通貨の流出を防ぐための保護主義的な金融政策に反対する立場）と銀行主義学派（代表者：トゥーク、ウィルソン：国内の物価水準や貨幣量を調整するために保護主義的な金融政策を推奨する立場）の論争に関心を持つようになった。そこで、上述のようにそれぞれ立場の学者の原典を読み進めたという。その過程で生み出された研究成果は、「リカードオ金融理論の根本問題」（『研究と資料』、1931年）、「金融統制の一原理としての観たるピール銀行法」（『研究と資料』、1932年）、「オーヴァーストンの金融統制理論」（『経済論叢』、1932年）、「ソントン金融統制理論の根本思想（上・下）」（『経済史研究』、1936年）等である。

一覧表：一谷藤一郎によるハイエク論

1935年	「ハイエク教授の素描」(『學友會誌』第10号)
1944年	『ハイエク 資本の純粹理論』(実業之日本社)
1951年	「ハイエク」(『経済学小辞典』岩波書店)
	「ハイエクの気苦労」(『エコノミスト』別冊)
1952年	『ハイエク 資本の純粹理論 (改訳版)』(実業之日本社)
1954年	『ハイエク 隷従への道』(東京創元社)
	「F.A.ハイエク Friedrich August von Hayek」(『理想』第253号)
1956年	「オーストリア学派経済学の新展開」(『経済学全集』第10巻)
1958年	「オーストリア学派経済学の特質と発展」(『経済セミナー』3・4・5月)
1960年	「資本の純粹理論」(『世界名著大辞典』第3巻)
1964年	「ハイエクと資本理論」(『世界経済』4月)
1992年	『隷従への道—全体主義と自由』(一谷映理子と共訳、東京創元社)

参考文献

【資料】

『兵庫縣立神戸經濟専門學校小史』、兵庫県立神戸經濟専門學校、1951年。

【文献・論文】

- 一谷藤一郎 1931. 「リカードウ金融理論の根本問題」『研究と資料』(神戸高等商業学校) 創刊号、47-65頁。
- 一谷藤一郎 1932a. 「金融統制の一原理として觀たるピール銀行法——ピール銀行法制定の素因と其の過程」『研究と資料』(神戸高等商業学校) 第二号、49-66頁。
- 一谷藤一郎 1932b. 「オーヴァーストンの金融統制理論」『經濟論叢』(京都大学) 35(6)、847-869。
- 一谷藤一郎 1936a. 「ソオントン金融統制理論の根本思想(上)」『經濟史研究』15(2)、1-14頁。
- 一谷藤一郎 1936b. 「ソオントン金融統制理論の根本思想(下)」『經濟史研究』15(3)、16-32頁。

- 一谷藤一郎 1937. 『米国金融統制の基本問題』（神戸高等商業学校貿易研究室研究報告）第一冊。
- 一谷藤一郎 1953a. 「貨幣理論と一般価値理論との統合——特にケインズの『一般理論』における統合の試みについて」『季刊 理論経済学』、4(1): 1-8 頁。
- 一谷藤一郎 1953b. 「川口弘助教授の批判に答う」『季刊 理論経済学』、4(3-4): 235-236 頁。
- 一谷藤一郎 1956. 「フリードリッヒ・フォン・ハイエク」『経済学説全集』（第10巻）所収、北野熊喜男編、河出書房、197-228 頁
- 一谷藤一郎 1958a. 「オーストリア学派経済学の特質と発展（1）」『経済セミナー』（3月号）、9-12 頁。
- 一谷藤一郎 1958b. 「オーストリア学派経済学の特質と発展（2）」『経済セミナー』（4月号）、9-12 頁。
- 一谷藤一郎 1958c. 「オーストリア学派経済学の特質と発展（3）」『経済セミナー』（5月号）、13-16 頁。
- 一谷藤一郎 1961. 「一谷藤一郎博士略歴及び著作目録」『大阪大学経済学』（大阪大学）11・12、389-407 頁。
- 一谷藤一郎 1963. 「古典学派から近代経済学へのみち」『金融ジャーナル』4(11)、46-47 頁。
- 一谷藤一郎 1971. 「ハイエク」『経済セミナー』（12月号）、275号、24-25 頁。
- 伊藤眞雄 1931. 「発刊の辞」『研究と資料』（神戸高等商業学校）創刊号：1-2 頁。
- 伊藤眞雄 1937. 「発刊の辞」、『米国金融統制の基本問題』、一谷藤一郎著、神戸高等商業学校貿易研究室報告、第一冊：1-2 頁。
- 上谷繁之 2021. 「一九二〇年代後半における河上肇の唯物史観理解——「自己清算」論文を中心として」『社会思想史研究』45、近刊。
- 川口弘 1953. 「有効需要弾力性に関する一谷藤一郎教授の所論について」『季刊 理論経済学』、4(3-4): 233-236 頁。
- 小松泰馬 1979. 「高丸ヶ丘へ 新校舎移転当時」『神戸商科大学五十年史』、神戸商科大学校史編纂委員会編、49-50 頁。
- 高木正雄 1977. 「神戸商科大学と神戸<2>スマート校長」『神戸っ子』（1977年9月）197号、36-37 頁。
- 高木正雄 1978. 「生き続ける創立の精神」『神戸っ子』（1978年1月）201号、42-43 頁。

- 谷口重吉 1936. 『オーリンの貿易理論』(神戸高等商業学校貿易研究室叢書) 第一巻。
- ハイエク著、江頭進訳 2011. 『資本の純粹理論[I]』『ハイエク全集』(第二期、第8巻)
所収、春秋社。
- ハイエク著、江頭進訳 2012. 『資本の純粹理論[II]』『ハイエク全集』(第二期、第9巻)
所収、春秋社。
- ハイエク著、一谷藤一郎・一谷映理子訳 1992. 『隷従への道: 全体主義と自由』改訳、
東京創元社。
- ハイエク著、西山千明訳 1992. 『隷属への道』『ハイエク全集』(第一期、別巻) 所収、
春秋社。
- ハイエク著、村井章子訳 2016. 『隷従への道』日経 BP クラシックス。
- 牧野邦昭 2018. 「荒木光太郎の研究と活動」『荒木光太郎文書解説目録(増補改訂版)』
名古屋大学国際経済政策研究センター情報資料室、6-23 頁。
- 松山直樹 2021. 「県立神戸高等商業学校と伊藤眞雄——兵庫県立大学国際商経学部の
起源を辿る」『商大論集』(兵庫県立大学)、近刊。

凡例として、以下の点を記しておきたい。

- 1 旧仮名遣いや旧字体は現代仮名遣いや新字体に改めた。
- 2 原文において示された西暦等の漢数字はアラビア数字に置き換えた。
- 3 本文中の傍点は、原著者が与えたものである。
- 3 本文中の〔 〕内の表現は、原著者のものでなく、復刻者は与えたものである。
- 4 本文中の注は、原著者のものでなく、復刻者が与えたものである。
- 5 本文中のルビは、カタカナのものを除いて、復刻者が与えたものである。
- 6 本文中における人名の表記は、経済学史学会編（2000）『経済思想史辞典』丸善における表記に従って修正したものがある。

ハイエク教授の素描

『學友會誌』（県立神戸高等商業学校學友會）第十号、1935年）

一谷藤一郎

1

思いがけなきロンドンからのハイエクの返信は、ウィーンでミーゼス、ハーバラーと共に親しく彼の指導を受けようとした私の期待を全く裏切り、陰鬱なベルリンの冬は、いやが上にも私の気持ちを暗くした。しかし彼の懇切を極めた返書は、当時既に一年以上も前から彼がロンドン大学に正教授として迎えられていたことや、ウィーンの学界に現在活躍しつつある人々の動静を知らしめるに充分役立った。そればかりではない。遍歴の道すがら、必ずロンドンに立寄ると予想せる彼は、ロンドン大学に彼を訪へば、何時でも快く面会しようと手紙の末に書き添えることを忘れなかった。一年後彼に会える希望を抱きながら、目指す学都ウィーンに乗り込んだのは1933年の晩春の頃であった。しかし一年後でなければ、またロンドンでなければと思っていたハイエクに、ゆくりなくも「予想さえしていなかったが」一年も経たない中に、しかもウィーンで相知る機会を恵まれたとき、私は^{しみじみ}泌々自分の幸福を思わずにはいられなかった。

既にウィーンにも秋風がたち、街路樹の葉が黄ばみ始める9月半ばだったろう。シ

ユテファン寺院の傍のレストラン「緑の錨」へ、いつもの如く昼食に赴いた私は、そこで思いがけなくハイエクに面接する機会を持つことが出来た。私をハイエクに紹介してくれた親友ヨンや、間もなく米国に出かけるマッハルプ夫妻等と卓を囲み歓談しながらの食事は、常よりは遥かに美味しかった。一両日後ハーバラーの私宅で、私は再び彼及び彼のフラウ [Frau, 夫人] と相会した。ウィーン滞在中、絶えず研究に日常生活に非常な好意をもって援助してくれたハーバラーから、私はその日も晩餐会の招待を受けた。ハイエク夫妻、ロンドン大学教授ヒックス等の遠来の客を始め十数人と共に秋の夜長を楽しく語り合った事は、いまもなお忘れ得ぬ美しい追想の一つである。ハイエクは彼の故郷への訪れを機として、ウィーン大学教授、その他の専門家の集団である国民経済学会に於いて、ある夕「資本の不変維持」²³と題する研究発表を試みた。これに対し相当激しい論争が遅くまで繰り返されたことはいままでもない。私はただに彼の風貌に接し得たのみならず、また彼の最近に於ける研究の成果に触れることが出来、予期せざる大きな収穫に対し心から感謝したい気持ちで一杯であった。

2

カール・メンガーによって築き上げられたオーストリア学派は、その後ベームーバヴェルク、ヴィーザー等の優秀な後継者の輩出に伴って、経済学界に確固不動の地位を占め、燦然たる光輝を放つに至ったことは周知の如くであるが、最近特に貨幣理論、貨幣的景気理論の領域においてウィーン学派の動向は広く学界の視聴を集めている。このウィーン学派の名声を双肩に担うものは、ミーゼスを中心とするハイエク、ハーバラー、モルゲンシュテルン、ストリグル、マッハルプ等の一群の人々であるが、ハイエクはハーバラーと共にミーゼス門下の中、最も異色ある^{いざい}偉材として知られている。といえは人はおそらく彼を相当の年輩と想像するであろうが、彼はハーバラーより一年前の1899年生まれというから、西洋流にいえばいまだに36歳の若さで、まさに少壮教授の部類に入るべき人である。

彼の風貌は人に^{おんが}温雅の感を与えるに充分であり、彼の応対振りには、ウィーン人に特有な柔らか味が全面的に流露している。彼の風格に現れる上品味は、ウィーン大学のかつての植物学教授を父に持つ彼の育ちの好きを物語るに足りる。彼の温雅、寛容は、まさにハーバラーの重厚、謹厳に比すべき特徴といえるであろう。彼が私に寄せた好意は今もなお私の快き印象となって残っている。1934年の秋、丁度新学年が始ま

²³ 同報告は、1935年に発表された‘The Maintenance of Capital’ (*Economica*, 2(7), 241-276) に関連するものであろう。

ろうとするロンドン大学の研究室に彼を訪ねたとき、彼は私を^{あたか}宛も十年來の旧知の如く遇し、すべてに行き届ける配慮を惜しまなかった。私の希望を聞くと直ぐに彼は^{わざわざ}態々大学の事務室まで私を同伴し、最も簡単に私の目的の達せられるような方法を見出す為に自ら種々折衝を重ねてくれた。そればかりではない。彼は広く「経済学説」を研究題目とするゼミナールを、毎週水曜日午後6時から2時間開いており、その研究員として参加するには相当厳しい制限があったのであるが、それにも拘らず彼は快くその一員たるを許し、更に私を他の研究員に懇切に紹介してくれたりした。彼はゼミナール以外になお「資本と利子」の題下に、毎週火曜日午後5時より一時間の講義を担当していた。彼の講義は彼一流の精緻な論理によって組み立てられているので相当難解なものであった。一日彼は私に、どうだ、自分の拙い英語が分かり難くないかと問いかけたので、私は教授の英語は極めて明晰で聞きとり易いが、内容が相当複雑なので理解に困る点もあると答えると、彼は早速、ではここに講義案が全部あるから、これを先ず読んで講義をきいてくれたまえと無造作に貸し与えてくれた。それを下読みして講義に出席すると、なる程よく分かる。もとより私は彼の理論をことごとく妥当なものとして承服しているのではないが、ここにはそれに触れる必要はなかり。ともあれ彼の好意は実に徹底的であった。私がロンドンを出発するとき、帰朝の途上アメリカを経由するといえ、直ぐに彼の親しい2、3の大学教授に丁寧な紹介状を認めてくれたのも彼である。彼のこの優れた性格は、僅か二ヶ月余りの短期間の接触であったにも拘らず、私の脳裏に強く印象づけられている。

3

彼にはまたこんな一面がある。ある夕、食事を彼と供にした後、私たちはレストランからほど近いトッテナム・コートのあるカフェーに入った。夕食後の安息を求める客が殆んど空席を余さないまでに満ち溢れていた。コーヒーを啜りながら歓談していると、突如オーケストラは緩やかにウィーナー・ワルツを奏し始めた。と彼はみるみる上気したように、ウィーナーワルツ！ウィーナーワルツ！と再三小声で繰り返しながら、私を顧みて微笑し、遠く祖国を思い出しているのであろうか、小児のようにはしゃいでいた。その顔を私はいまも忘れ得ない。

しかし一度学問の世界に立入ると、彼の寛容は忽ち消え失せ、峻厳と鋭敏が現れてくる。そこには^{いささか}些の卑屈な妥協も不用意な看過もない。飽くまで鋭く真理を追求してやまない気概が窺われる。この真摯な学徒としての態度は、全くハーバラーと共通

であるが、ただハーバラーに見られる地味な行き方が、ハイエクに於いては天才的な華やかさに代わるというところに、両者の相違があるかに見える。ハーバラーの著書における質実さに比し、ハイエクのそれに独断的と思われる分子の含まれているのも必ずしも偶然とはいえぬであろう。いうまでもなく私は今孰いづれの態度がよりよきかを断定しようとしているのではない。ハイエクとハーバラーと対比する場合に、私の主観に映るまを率直に披露したに過ぎない。ハイエクとハーバラーとの交友は実に羨ましき程で、自らのアルバイト [Arbeit, 研究成果] を発表する前に、互いに先ず批判を仰ぎ、それによって更に修訂を施し、より完全なものを公けにすることに努めている。彼らが優秀なアルバイトを数多く残しているのもまた当然の結果といえよう。

4

彼が一度ロンドン大学に正教授として赴任し、ウィーン学派の思想を根底とするアルバイトを相次いで発表するや、英国経済学会は為に著しき刺激を受け、種々の主題に就き盛んな論争が此處彼處に展開せられている。特にロンドン大学の「エコノミカ」誌上に行われたケインズとの論争は、知らるる如く相当激しきものである。理論経済学の領域におけるウィーン学派の貢献の大なるを認めざるを得ない、と私に洩したケンブリッジ大学のロバートソン²⁴の言は、このことを裏書きして余りあるといい得るであろう。

彼の学問的業績の一部は既に我が国へも移植せられている。即ち 1929 年先ずウィーンで、4 年後の 1933 年に至ってロンドンで出版せられた“Geldtheorie und Konjunkturtheorie” (Monetary Thoery and the Trade Cycle) は、本年「景気と貨幣」と題し、第一銀行重役野口弘毅氏によって訳出せられ、1931 年に先ずロンドンに於いて、次いで同年ウィーンに於いて刊行せられた“Preise und Produktion” (Prices and Production) は、既に昨年、大阪商大助教授豊崎稔氏によって「貨幣と景気変動」の題下に邦訳せられている²⁵。“Gibt es einen Widersinn des Sparens?”は 1931 年にウィーンで出版せられた。これに対し我が国では高田保馬博士が「節約の矛盾について——ハイエクの節約

²⁴ 当時、D.H. ローバトソン (Sir Dennis Holme Robertson, 1890-1963) は、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジのフェローで、ケンブリッジ大学の経済学准教授 (Reader) の地位にあった。1934 年に王立経済学会 (Royal Economic Society) が LSE で開催されているので、その際に一谷は彼と言葉を交わしたのかもしれない。ロバートソンは 1939 年から 1944 年にかけてロンドン大学で教鞭を取った後、1944 年にケンブリッジ大学の経済学教授 (Professor) に就任した。

²⁵ 現在、これら二著作の邦訳は、古賀勝次郎・嶋中雄二他訳『貨幣理論と景気循環／価格と生産』『ハイエク全集』(第1期、第一巻、春秋社) に収められている。

賛美論に対する疑問」と題する論文に於いて²⁶、彼の所説を批判せられている（同博士「利子論研究」昭和10年発行、498頁以下参照）。彼の自著ではないが、伊太利〔イタリア〕のファンノ、和蘭〔オランダ〕のホルトロップ、コープマン、瑞典〔スウェーデン〕のミュルダール、故ヴィクセル等の雄編を編纂、1933年ウィーンで発行せられた“*Beiträge Zur Geldtheorie*”〔貨幣理論への貢献〕²⁷は学界に寄与するところが少なからぬものである。更に本年ピアソン、ミーゼス、ハルム、バローネ等の論文に彼自らの二篇を加えて編集した“*Collectivist Economic Planning*”〔集産主義的経済計画〕がロンドンから出版せられている²⁸。その他彼が「エコノミカ」、「エコノミック・ジャーナル」を始め種々の学術雑誌に特色ある多数の論文を発表していることは、ここに改めていうまでもない。

5

彼の口吻〔話ぶり〕より察すれば、彼は永く英国に止まるつもりで²⁹、祖国オーストリアに帰る日を予期してはいないようである。穏やかなターナーの絵画を想わずロンドンの静かな郊外の雰囲気が、彼にはひどく気に入っているらしい。それにまた流石、経済学の最も早く発達した英国だけに、ヨーロッパ大陸とは異なった学問的刺激を受け得られることも、彼には大きな喜びであるらしい。この好ましい所に居を構え、じっくり落ち着いた気分で研究に耽り得る彼は、必ずや自ら幸福とおもっていることだろう。彼のロンドン大学に於ける講義は常に多数の学生を集めている、もとよりその理由の一つに限られ得ないが、彼の理論が好かれ悪しかれ、何等かの意味において新しき問題を提供するという一種の魅力を持つことに起因するは、到底否定するを得ないであろう。1934年の10月から始めた講義「資本と利子」が終わると、本年〔1935年〕1月から「変動の理論」に移り、5月から「貨幣政策」の問題に入る予定と聞いていたから、これらの講義はもう既に終了したことであろう。間もなく来らんとする新学年に彼は如何なるテーマを選んで講義を始めようとしているのであろうか。

オーストリア学派の輝かしき伝統の下に育まれた彼の思想の種子は、異郷の地に美しき花と咲き、豊かな実を結ぶことになるのであろう。それを秘かに期待しているものは、強^{あなが}ち独り筆者のみではあるまい。ハイエク教授の多幸を祈って素描の筆を搦^お

²⁶ 高田保馬 1934. 「節約の矛盾について——ハイエクの節約讚美論に対する疑問」『経済論叢』38(5), 945-963頁。

²⁷ Hayek, F.A. ed. [1933]2007. *Beiträge zur Geldtheorie*. Reprinted edition. Wien: Springer.

²⁸ Hayek, F.A. ed. [1935]2015. *Collectivist Economics Planning*. London: Routledge & Kegan Paul.

²⁹ 後に一谷は『隷従への道』（1954年、東京創元社）の「訳者あとがき」において、1950年にハイエクがシカゴ大学へ移籍した理由について、彼の学問的関心が哲学や心理学へ広がったことにあると指摘している。

く。(1935年9月15日稿)

追記 私はさきに神戸商大新聞部の依頼に応じ、今秋発行せられるべき同紙記念号「六甲台」に「ハーバラー Gottfried Haberler」と題する一文を寄せた。本稿に興味をもたれる読者は同紙を併読することによって、単に本稿に於いて、ところどころ比較対照せられたに過ぎないハイエクとハーバラーの性格の相違を、更に明確に理解せられるであろう。

ゴットフリード・ハーバラー *Gottfried Haberler*

(神戸商大新聞 (第 65 号) 付録『六甲台』、1935 年 10 月 25 日発行)

一谷藤一郎

1

ベルリンに^{きゆう}笈を下して、留学生生活を始めてから、まだ一ヶ月経つか、経たない 1933 年の 3 月、陰惨な冬は街の内外を覆い、暗い寒い日は続く。不慣れなドイツ文の手紙を認めて投函したものの、それが梨の^{つぼて}礫に終るのではないかという心許なさを、私はどうするとも出来なかった。然し二、三日後のハーバラーよりの返信は、すべてを杞憂に終わらしめ、ヨーロッパに於ける私の研究生生活の前途に、光明を与えるに充分であった。

彼の手紙は^{まこと}洵に懇切を極めたもので、ゼミナールの参加を歓迎するは勿論、出来るだけの援助を喜んでくれるから、何時からでもやって来給え、とのこと。私は飛び立つ思いで即刻ウィーンに向かおうとさえ思った。然しウィーン大学の夏学期は、5 月初旬からなので、更にもう一ヶ月、ドイツ語練習の為にベルリンに留ることとした。

2

ウィーンの街の並木の青葉が、爽やかな初夏の風にそよぐ 5 月初旬のある日の午後、私はスツベン・リンクの商業会議所の一室に、ハーバラーを訪ねた。カール・メンガー —— ヴィーザー —— ベーム・バヴェルク —— ミーゼス。この輝かしき伝統を、ハイエク (現在ロンドン大学の正教授)、その他の^{コレゲ}同僚と共に更に発展せしめて、新ウィーン学派の存在を、学界に広く認めしめつつあるハーバラー、といえば、人はおそらく彼を、相当の年輩者と想像するであろう。然し彼は 1900 年生れというから、西洋流にいえば、未だ 35 歳の若さだ。

重厚、懇篤な彼の応対振りから、いかにも謹厳な学徒らしい彼を見出すことは容易である。彼は私の研究題目、滞在の予定等を聞いた後、日本の経済情勢、特に「円」の対外価値の暴落の事情を仔細に訊ね、ハイエクの編集にかかる *Beiträge zur Geldtheorie* [貨幣論への貢献]³⁰及び、他一冊を近刊の良書として推薦した後、ゼミナ

³⁰ 正確な書誌情報は、注 27 を参照されたい。

ール、講義、その他の研究会には努めて出席するよう、懇^{ねんごろ}な注意を与えてくれた親切は、いま思い出しても嬉しい。

3

毎日 12 時半から 1 時頃までに、彼はモルゲンシュテルン、ストリグル、マッハルプ、その他の若き人々の一群と共に、街の中央にあるウィーン最古の名刹、シュテファン寺院から程遠からぬ、レストラン「緑の錨」で昼食を摂り、それから近くのドーム・カフェーか、商業会議所の傍のカフェーで休息しながら、その日の数多くの新聞に眼を通すのを例としていた。こんな場合、彼は余り無駄口をきかなかつたが、談が一度学問上の問題に触れるとかなりよく喋った。彼のこの態度は、専門家の研究団体たる国民経済学会や、ミーゼス教授の私的ゼミナールなどに於いても、屢々見受けられた。彼の質問はよく問題の急所を捉え、その批判は鋭いものであった。

1933 年の夏学期、彼はモルゲンシュテルンと共同で、独占的競争 (Monopolistischer Wettbewerb) 価格理論を主題とするゼミナールを、毎週月曜日の 6 時から 8 時まで開いた。この夏学期に、彼はなお財政学の主要問題につき講義を行うべき予定だったが、これは取止めになった。33 年から 34 年への冬学期において、彼は「貨幣理論と貨幣政策」の講義を毎週月曜日の午後 4 時より 6 時まで行い、これと同時に、モルゲンシュテルンと共同で、同じ主題のゼミナールを、彼の講義終了後、6 時から 8 時まで開いた。

これらのゼミナール、講義に於いても、彼の態度は極めて謹厳で、講義の中途でも、時に学生の質問を許し、また彼自身明瞭ならざる点に立ち至るときは、学生を相手に想を練っていくといった調子である。彼はまた屢々^{しばしば}グラフを用い、カーブを書いた。ゼミナールにおいては、彼にとり理解し得ない点は、飽くまで報告者に質し、決して問題を曖昧の中に葬り去るようなことはなかった。これが為にゼミナールの進行が妨げられても、それは彼の余りに意に介するところではなかったらしい。

彼は^{ディスカッション}討論をよく好んだ。それについてこんな思い出がある。ある夕、彼の晚餐会に招待せられた。そこには若き学徒が十数人も集まっていた。一同食事を済まし、歓談している中に、談は^{たまたま}偶々学問上のことに移り、議論続出、容易に尽きそうにもない。そこでハーバラーは、ではこれからカフェーへ行き、更に討論を続行しようと、夜の 11 時近くから、当の相手を引き連れて出掛けて行った。彼の面目はこんなところに躍如している。ドイツ、英国、米国等の諸国から若き学徒にして、彼を慕って、ウ

ィーンに留まる者の少なくないのもまた、偶然でないようである。

4³¹

国際連盟経済部より「現下の世界不況の原因とその克服策」研究の委嘱を受け、約一ヶ年、ジュネーヴに招聘せられることに決定した昨年1月のある日、私は彼に祝辞を述べると、冬には珍しい麗かな陽光を、カフェーの硝子越しに背に受けて、彼は微笑しながら、「こんな難問題を自分の如き若輩が、しかも短時日の間に解決するなんて、凡そ無鉄砲なことだが、然し出来るだけの努力はしてみようと思っている」と、謙遜しながらも、何ごとか期するところあるものの如く、自信に充ちて語ったりした。

昨年夏、パリへの途上、彼との約束を果たす為に私はジュネーヴに彼を訪ねた。その夜、偶然催されたお茶の会に私を引張り出して、多くの彼の知己に一々紹介してくれたり、また嘗てウィーンに留学していた、英国人、米国人の中、私の顔馴染の者をすぐ呼び出して、歓談する機会を作ってくれたりした彼の好意は、今でも忘れることは出来ぬ。私のジュネーヴ滞在中、天気が悪く、名峰モンブランを仰ぎ見る機会が殆どなかったので、彼はモンブランを私に見せることの出来ないのは、甚だ残念だと会うごとに洩していた。その際にも、世界不況の原因及び対策は如何ですか、と訊ねたら、まだこれからだよ、とって朗らかに笑っていた。彼の研究の結果を早く知りたいと思っているのは、あながち私一人だけでもあるまい。

5

彼の学問上の業績を今更詳細に述べるのは野暮臭い話だが、“*Zeitschrift für Volkswirtschaft u. Sozialpolitik*” [経済学および社会政策雑誌]において、シュンペーターの貨幣理論を批判し、その基礎方程式のトートロジー性を明瞭に指摘したり、また“*Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik*” [社会科学および社会政策雑誌]において、ハーンの信用論に痛烈な批判を加えたのも、周知の如く彼である。その他シュモラー年報、ウィーン大学の国民経済雑誌に掲載 [せ] られし彼の論文も少なくない。単行本としては、1927年出版の「物価指数の意義」(Der Sinn der Indexzahlen) は、好著としての評判高く、最近においても諸著に引用されている。一昨年 [1933年] 刊行せられし「国際貿易論」(De internationale Handel) は、英国エコノミスト誌上において激

³¹ 原文では、第4節に「ハーバラー教授」と題された若きハーバラーの写真が掲載されているが、鮮明ではないので、この度の復刻に際してその写真の転載を見送った。

賞せられ、一日も早く英訳書の出現を望めるを見ても、その書の優秀の程度を知り得るであろう。昨年出版せられし「自由商業政策と統制商業政策」(Liberale u. planwirtschaftliche Handelespolitik) は、ヴェロスタとの共著になっている。

彼の著書は概して、引用文献豊富にして、地味、堅実に理論を進めているところに、特色があるように思える。これは恐らく彼の人間性の然らしむるところであろう。ハーバラーには、ハイエクの如き、不^ふ覇^ぱ奔^{ほん}放^{ほう}、天才的な方面が見られないが、その代りハイエクの如き独断的臭味なく、飽くまで質実、精確に理論を展開して、彼独特の風格を備えしめている点は、明[ら]かに彼の長所として認めらるべきであろう。

6

ハーバラーを語って、なお語り^かく^く描^えき^きせない憾はあるが、少しの余白を彼の夫人の為に充てたい。夫人は上品で、教養あり、而^{しか}も愛嬌よき人である。無口にして、動もすれば無愛想に陥らんとするハーバラーの社交を助け、常に種々心を^{くだ}砕^{くだ}いていたようである。遠く故国を離れ、未知の土地に留まり研究することは容易でないだろう、と慰めてくれたり、ドイツ語が上達したと云っては、更に励ましてくれたりしたのも夫人である。ジュネーヴに訪問したとき、これからフランス語を学びにパリに赴くのだと云ったら、フランス語を少しでも早く覚えるようにと、昼の食卓に私の隣に一フランス婦人の席を設けて、会話の機会を作ってくれたのも亦、夫人である。

夫人は英語、フランス語に通じ、特にフランス語は幼少の頃より始められたので、^{まこと}洵^{まこと}に堂々たるものである。夫人は必ずや、ハーバラーのよき助手として、彼の学界の躍進を愈々大ならしめることであろう。遥かにハーバラー夫妻の健在を祈って^{かくひつ}擱^{かくひつ}筆^{ひつ}する。

——1935.6.20——

一谷藤一郎の経歴

1900年（明治33年）	一谷家の長男として京都市に誕生
1907年（明治40年）	京都市立日彰尋常小学校に入学
1913年（大正2年）	京都市立第一商業学校に入学（予科2年、本科4年）
1919年（大正8年）	同校を卒業。浅野物産株式会社大阪支社に入社
1921年（大正10年）	官立神戸高等商業学校に入学（予科1年、本科3年）
1925年（大正14年）	同校を卒業。京都帝国大学経済学部に入學
1926年（大正15年）	富田ミチコと結婚
1928年（昭和3年）	同校を卒業。京都帝国大学助手に採用、経済学部勤務
1929年（昭和4年）	県立神戸高等商業学校の講師職を委嘱、5月に京都帝国大学を退職。11月に県立神戸高等商業学校教授に就任
1930年（昭和5年）	県立神戸高等商業学校にて金融論を担当
1931年（昭和6年）	県立神戸高等商業学校にて財政学を兼担。同校の『研究と資料』創刊号に「リカアドオ金融理論の根本問題」を發表
1932年（昭和7年）	第一回卒業生の就職斡旋のため朝鮮京城に出張
1933年（昭和8年）	在外研究のため、ドイツ（ベルリン大学付属語学学校）、オーストリア（ウィーン大学）、フランス（アリアンス・フランセーズ）、イギリス（ロンドン大学）、アメリカ（ハーヴァード大学、シカゴ大学、スタンフォード大学）に滞在
1935年（昭和10年）	帰国後、県立神戸高等商業学校にて金融論と財政学を担当。同校に貿易研究室が設置、初代室長に就任
1937年（昭和12年）	『米国金融統制の基本問題』を県立神戸高等商業学校貿易研究室の研究報告（第一冊）として刊行
1938年（昭和13年）	金融事情の視察のため、満洲国および中華民国に出張
1941年（昭和16年）	『金融統制の理論』（有斐閣）を出版
1943年（昭和18年）	『金融統制の理論（増訂版）』（有斐閣）を出版
1944年（昭和19年）	大阪商科大学の教授職に就任し、金融論を担当。『ハイエク 資本の純粹理論』（実業之日本社）を出版
1945年（昭和20年）	3月の空襲で蔵書を焼失。9月に金融学会理事に就任
1948年（昭和23年）	大阪大学法文学部教授に就任。大阪商科大学教授を兼任
1949年（昭和24年）	『金融統制の理論（増訂版）』で経済学博士号を取得。大阪大

	学評議員に就任（1952年9月まで）。法経学部に配置転換。 日本経済政策学会理事に就任
1951年（昭和26年）	『変動期の金融理論』（有斐閣）を出版
1952年（昭和27年）	『ハイエク 資本の純粹理論（改訳版）』（実業之日本社）を出版。学術奨励審議会用語分科審査会専門員を委嘱
1953年（昭和28年）	経済学部に配置転換
1954年（昭和29年）	『ハイエク 隷従への道』（東京創元社）を出版
1955年（昭和30年）	『景気変動論講義』（三和書房）を出版
1957年（昭和32年）	3月に関西日壇協会理事に就任、4月に大阪大学経済学部長に就任（1959年3月まで）
1958年（昭和33年）	財団法人調査統計協会理事に就任
1959年（昭和34年）	学部長の任期満了後、4月より再び大阪大学評議員に就任（1960年3月まで）
1964年（昭和39年）	大阪大学を定年退職し、同大学名誉教授。4月より関西大学経済学部教授に就任
1965年（昭和40年）	関西大学を退職。名古屋市立大学経済学部教授に就任
1969年（昭和44年）	名古屋市立大学を退職し、同大学名誉教授。4月より北日本学院（現・旭川大学）の教授職に就任
1973年（昭和48年）	北日本学院を退職。大阪経済法科大学経済学部教授に就任 ³²
1979年（昭和54年）	逝去

（出所）『大阪大学経済学』（1961年，第11巻，第1・2号）を基にして、筆者作成。

³² 一谷の大阪経済法科大学の退職時期は不明である。

